

# 21世紀協会

## 2004年度 事業完了報告書

### 目次

全体の評価.....	2
今期の主なトピック .....	2
各事業.....	3
1 就学支援事業.....	3
1-1 就学支援事業.....	3
1-2 識字教育事業.....	4
2 マンニャン村コミュニティー開発事業.....	4
2-1 マンニャンコミュニティー・オーガナイズングと農業指導 .....	4
2-2 衛生環境整備事業.....	5
3 マンニャン人間開発センター .....	5
3-1 センターの建設 .....	5
3-2 各種職業訓練.....	6

## 全体の評価

2005年1月、3年に及ぶ協議調整の末、JICAの「NGO草の根技術協力事業」の契約が調印された。この事業はJICAとパートナーシップを結ぶことにより、アムナイ川流域で識字教育を推進、また協会敷地内に念願の事務所をはじめとする「マンニャン人間開発センター」の建設が含まれている。この事業は、過去15年に及ぶ協会事業の総括であり、また拡大充実のための足がかりとなるはずである。

これまで現地サンタクルス郡で就学促進事業（奨学金事業）を中心に、きわめて限られた地域で活動してきたが、地域マンニャン社会での協会の存在は著しく重要なものになっている。さまざまな支援をもとめて事務所を訪れるマンニャンの人々は途絶えることがなく、特に重篤な結核患者をはじめ医療援助のニーズは激増している。彼らのほとんどが、「読み書き」を知らず、病院で適切な会話ができない人たちであり、無償の薬のみならず、病院との間の仲介者として協会を頼ってくるのである。地域における“タガログ社会”と“マンニャン社会”の掛け橋、両者の総合理解のための代理人としての協会の役割はますます大きくなっている。

さらに特筆すべきは、こうした二つの社会の掛け橋となっているのは、もはや協会の日本人やタガログ人スタッフではなく、トレーニングを受けたマンニャン・ボランティアスタッフである。ここ数年、元奨学生のボランティアスタッフが質量ともに充実してきた。日々の業務の主な担い手は彼らであり、マンニャン村で識字教育を担い、病院への患者の付き添い、農場の管理などさまざまな仕事を男女約10名のボランティアスタッフがこなしている。こうしたマンニャンスタッフの活躍の背景には、日々の指導、そして近年充実してきた各種職業訓練の成果もあり、“人間開発”をキーワードにした協会の各事業がうまく連携しあい、機能していることの証明といえる。

## 今期の主なトピック

- **AALPP（アムナイ川流域識字教育推進事業）**  
JICAの「NGO草の根技術協力事業」によるアムナイ川流域での識字教育事業スタート。2005年1月の契約に先駆け、2004年10月より従来のパクパク村に加え、マンガハン村での識字教育を開始。約20名の子供達が簡単な「読み書き」を学んだ。また、2005年2月「マンニャン人間開発センター」の建設が始まり、3月までに事務所、女子寮の2棟がほぼ完成した。

➤ **各種職業訓練の充実**

ルマンバヤン農場での養殖事業、アラカアク水田の合鴨農法の継続的実験など“パーマカルチャー”を合言葉にした農業実習、また、女子のケーキ作り、ミシンを使った裁縫訓練など年々訓練内容が充実してきている。これに加えて協会奨学生の指導、会計帳簿の部分的管理、結核をはじめとする病人の対応など協会業務の面でもOJTの成果は大きく、訓練生のボランティアスタッフとしての役割が飛躍的に拡大した。

<b>各事業</b>
------------

<b>1 就学支援事業</b>
-----------------

**1-1 就学支援事業**

**奨学生状況（（）内はドロップ・アウト生数）**

	小学校	ハイスクール	大学及び専門学校	計
アラガン族	7	5(2)	1	13(2)
イラヤ族	1(1)	11(1)	2(1)	14(3)
計	8(1)	16(3)	3(1)	27(5)

過去数年奨学生の数が増え横ばい状態である。協会の経営状態をそのまま表していることもあるが、ハイスクール候補生の主な出身地であるカラミンタオ村小学校の卒業生数そのものが停滞気味であること、また、特にアラガン族の場合落伍率が高くむやみに受け入れても定着率が低いことが原因である。しかしその内容は大きく変わってきている。かつて奨学生のほとんどがカラミンタオ村（イラヤ族）の時代もあったが、今期終了時ではアラガン族、イラヤ族が同数であった。また、アラガン族のハイスクール生も少しずつ増えており、協会スタッフとして、また地域のリーダーとして活躍できる人材が今後アラガン族の中からも出てくることが期待できる。

今後 AALPP（アムナイ川流域識字教育推進事業）が展開し、また、JICA 事業による各施設が整備されれば、奨学生の出身地がサンタクルス郡全体に広がり、また受入数も飛躍的に増加するはずである。

## 1 - 2 識字教育事業

AALPP（アムナイ川流域識字教育推進事業）に先駆け、2004年10月よりランラナン村（マンガハン村）でも本格的に識字教室を開講した。1999年にすでに撤退しているバヤバサン村（シプヨ村）を別にすれば、パクパク村に次いで地域で二つめの識字教育ステーションである。数年内には、アムナイ川流域の協会事業地5村（パクパク村、ランラナン村、ソアカン村、カマンブガン村、カンルアン村）の全てで識字教育が行われる計画であるが、そのための教員養成が今後の大きな課題である。かつてバヤバサンで開講した当初のような住民の識字教育に対する抵抗は今ではあまり見られなくなり、むしろ積極的に村への先生の派遣、教育への関心が大きくなってきている。物理的・心理的原因からマンニャン集落にタガログ人教師が赴任したがらない現状では、“マンニャン教師”、“村出身の教師”をじっくり育てていく必要がある。

---

## 2 マンニャン村コミュニティー開発事業

---

### 2 - 1 マンニャンコミュニティー・オーガナイズिंगと農業指導

アムナイ川流域を中心に、協会事業地から協会事務所を訪れるマンニャンの人々の数は年々増加する一方である。特に過去一年医療援助を求める人々が激増し、訪問者の対応に追われる日が続いた。また、識字教育のステーションが二つに増えたことにより、アムナイ川流域における協会の役割が明確になってきた。住民との対話量は増え、住民の協会への信頼はますます深まってきていると言えよう。こうしたことを背景に、2004年9月にはアムナイ川流域人間保障会議（Amnay Area Mangyan Conference on Human Security）構想の話し合いが始まった。この構想は、本来半遊牧生活を営み、“ムラ”意識、コミュニティー意識の脆弱な彼らにつけこんだ悪質な不法行為、人権侵害に対し、協会と各集落との信頼関係をベースにさまざまなセーフティー・ネットづくりが目的である。協会事業地5集落の間では一応の合意もできており、組織作りのための仮役員も選出されており、今後具体的なアクション・プランづくりが課題である。

先のアムナイ川流域人間保障会議（Amnay Area Mangyan Conference on Human Security）構想の内容にも盛り込まれるべきであるが、地域の「食の安全」の確立は重要な課題である。しかし過去数年協会の地域での農業指導は決して十分なものとはいえずその改善が必要である。協会では“パーマカルチャー”を合言葉に、「合鴨

農法」を進めるなどさまざまな試みを行っているが、実験農場での成果を今後どのようにマンニャン集落に導入するかが大きな課題である。マンニャンボランティアスタッフが急速に育ってきてはいるものの、事業地で活躍できる農業指導スタッフは不足しており、今後人材育成にますます力を注ぐ必要がある。

## 2 - 2 衛生環境整備事業

これまで衛生、医療援助事業はあくまで教育事業、コミュニティー開発事業の一環の中で捉えられ、むしろ周辺事業と考える向きもあったが、昨今事業地域での医療援助へのニーズは激増し、日々の業務の中で大きなウエイトを占めるようになった。特に結核患者（疑似患者）の訪問件数はうなぎ上りであり、2005年3月現在協会が管理する肺結核患者数は13名である。これはサンタクルス郡保健所で認識されている肺結核患者数が30名であることを考えると際立った数字であり、結核がマンニャン社会の中で深刻な問題になりつつあることを証明している。結核患者のほとんどの場合、協会のサービス内容は医療品の供給よりもむしろ行政や医療機関へのアクセスを可能にするための支援が中心である。教育を受けずかつ文化的物理的障壁を持つ彼らにとって、行政サービスの恩恵を受けることは至難の業であり、行政と患者の掛け橋としての協会の役割は大きな意味がある。彼らの文化を熟知した上で、地域マンニャン社会とのネットワークがなければ長期治療が必要な結核の場合完治はほとんど不可能と言えよう。今後マンニャン社会における識字教育のプロモーションと連動した衛生教育、行政側にいかにマンニャン社会の現実を理解させるか、といったアドボカシーがますます必要になってくるだろう。

---

## 3 マンニャン人間開発センター

---

### 3 - 1 センターの建設

2005年1月末、JICAの「NGO草の根技術協力事業」の契約が調印されるとともに、協会敷地1000平米内に事務所の建設がはじまった。マンニャン人間開発センター構想ができて以来実に4年越しの実現である。建設にあたっては、プロの大工を雇用するものの、協会マンニャンボランティアスタッフが訓練を兼ねて労働力の中心となる予定である。3月末までに事務所、女子寮がほぼ完成し、2005年度中にはセンター家屋の大半が完成する予定である。

### 3 - 2 各種職業訓練

2004年9月、カラミンタオ村を中心とするパグバハン川流域の一部が先住民永代地として正式に認められ、地権証書が授与された（Certificate of Ancestral Domain Title「慣習的領地証書」）。サンタクルス郡のマンニャン族居住区でははじめての土地権利獲得であり、その歴史的意義は大きい。指定地域は東ミンドロ州境にまで伸び、イラヤ部族が中心に生活しているが、内陸部ではアラガン族の集落もかなり散在している。地域ではある程度の自治権も伴うこの土地の譲渡に基づき、さまざまな自主的組織の活動が活発化してきているが、その組織の中心はカラミンタオ村である。村は協会奨学生をもっとも多く出しており、地域で突出して教育水準が高いことから、今後地域の中心として機能することは間違いない。

協会の職業訓練は訓練生の能力を開発することにより彼らの 経済生活を向上すること、 協会活動への自主的参加のみならず、 地域のリーダー育成の目的をもっておりその意味で地域への還元性はますます大きくなると思われる。事実訓練生の大半はカラミンタオ出身であり、近い将来地域のリーダーとして、マンニャン社会のリーダーとして活躍することが期待される。

具体的な訓練内容としては、今期は JICA 事業に関連して男子の大工訓練、魚の養殖を盛り込んだパーマカルチャー、また日常業務の一環ではあるが結核患者への対応を含めた衛生管理、帳簿管理などの訓練が加わり、ボランティアスタッフの協会の中での役割が格段に増えた。また、合鴨農法を含めパーマカルチャーは今後協会の“農業哲学”となるべきものであり協会内での技術の向上とともに、地域社会への着実な敷衍を目指していきたい。

反省点として、漁業訓練、鍛冶訓練など長らく訓練が途絶えているものが出てきているが、センター完成とともにまた“パーマカルチャー”実践の成熟とともに再開、統合されることが期待される。

訓練	内容/成果	訓練生
大工	プロの大工の助手として、センター建設に参加。大工仕事の基礎やまた、簡単な見積もりの仕方などを学ぶ	Greg Kaseson, Samuel Bernardo, Wilfredo Bernardo, Joeffrey Rinangyan, Larry Viguilla
合鴨農法	2004年2月の岸田教授招聘に基	Wilfredo Bernardo,

	づき実験に続いて協会アラカアク水田にて継続実験。	Calros Bernardo, Greg Kaseson, Roland Pacifico
パーマカルチャー (魚の養殖)	協会ルマンバヤン農場にて、ティラピア、ナマズの養殖を学びながら、養鶏養豚、園芸とのパーマカルチャー的統合を学ぶ。	Pedro Rinangyan, Joeffrey Rinangyan, Wilfredo Bernardo, Greg Kaseson
裁縫	ミシンを使った洋裁(パターン作成から縫製まで)	Emily Rinangyan, Carmen Bernardo, Raquel Miranda, Rechelle Pacifico
製菓	オーブンを使ったケーキ作り及び日々の献立づくり	Emily Rinangyan, Carmen Bernardo, Raquel Miranda, Rechelle Pacifico
帳簿管理	日々の出納、帳簿管理	Carmen Bernardo, Raquel Miranda
医療支援業務	結核患者のモニタリング、管理及び衛生についての基礎知識の獲得	Emily Rinangyan, Carmen Bernardo, Raquel Miranda, Rechelle Pacifico